

悪の組織『ルードネス』と戦う魔法少女、マジカル☆ティア。
持ち前の魔法の才能、類稀な戦闘センス、そして何よりも気高い正義の心によって、
日々迫りくる脅威を退けていた彼女。

「わたしがいる限り、世界の平和は壊させませんっ！」

そんな彼女の存在もあってか、悪の組織という
恐るべき脅威の前でも、人々は日々の平穏を謳歌していた。

しかし、そんな日々は、唐突に失われることとなる。

「ひ、卑怯ですっ……！」

「この方々を安全に返してほしくば……クク、わかりますね？」

敵の幹部が用意した狡猾な人質作戦の前に、マジカル☆ティアは
成すすべなく敗れることとなる。

「では、少し眠ってて貰いましょうか……ねッ！」

「ぐうっ……！？」

無抵抗のまま意識を刈り取られるティア。
力を失った彼女の体は、随伴の戦闘員達によって何処か引き擦られて行く。
その様を、人々は悲愴な面持ちのまま見つめるしかなかった。



「……わたしをどうするつもりですか？」
薄暗い部屋の中、ティアは目の前の男を睨みつける。

その体は重々しい機器に拘束され、
無残に引き裂かれた魔法少女衣装は、
大きく開かれた股座を一切隠すことは無い。

そんなあられの無い姿を異性に見られながらも、
彼女の顔に羞恥の色は無く、
むしろ、その瞳には強い意志の光が
煌々と灯っていた。



「ふむ……なるほど。私たちに抗うことを決めた時点で、既にこうなる覚悟はできていた、という事でしょうか。しかし」

男の合図に合わせて、ティアの頭部と股間部に、新たな装置が取り付けられる。

「その覚悟、何時まで保つでしょうかねえ？」

「な、なんですかこれ……？」

視界を完全に塞がれたティアの声に、初めて不安の色が混ざる。

「直ぐに分かりますよ——やれ」

男の声に合わせて、別の男が機器を操作した。



「ささささっ!?♡」

ティアの頭に取り付けられた装置から紫電が送り、それと同時に、股座の装置が稼働を始める。

ティアの大きく開かれた脚の中心を覆うそれは、震えるような駆動音と共に、彼女の秘所をゆっくりと、しかし確実に舐っていく。

「身体と頭、両方の開発を同時に進める装置です。

常人なら3時間ほどで『完成』するか、

あるいは壊れてしまうのですが……。

アナタなら一週間ほど必要でしょうか」



独り言のように囁く男の声は、ティアの耳には入らない。
今の彼女の頭には別の言葉——普段の彼女では
微塵も思いつかないような淫らな言葉の群れが、
所狭しと渦巻いていた。

ズド

（なんですかこ『おちんぼ』れ

ち、ちが『おまんこ』います……!?や、やだっ……!!

こん『ザーメン』なこと『オナニー』考えた『ケツマンコ』
な『まんこ汁』『デカチチ』いで『オナホマンコ』す……!!

「どうやら魔法少女にも、隠語の刷り込み程度の
洗脳であれば問題なく働くようですねえ……。

では引き続き」

追い打ちを掛けるように、ティアの胸に向け
注射器状の機器が近づけられる。

その気配に気付いたティアの喉から、
余裕を無くしたような、引きつったような音が漏れる。

「や、やめて」

「おやあり？ 初めて否定の言葉を口にしてくれましたね？

ですが当然、お断りします」

『薬液注入開始』

機械音声と同時に、ティアの胸に突き立った注射器と、二の腕に取り付けられたチューブから、蛍光色の液体が、少女の身体へと注がれていく。

間違いなく自分の体にとって毒となるものが、自分の中に浸透していく恐怖。死すら予感させるそれに、堅牢だった筈のティアの覚悟が、少しずつ、少しずつ揺らいでいく。

「あ、ああ……!?」

「自分の体に何をされているのか不安ですか？
ですがご安心を。」

ただの——そう、ただの、

性感度を、肉体のリミッターを超えて

高めるための媚薬と、肉体を性奉仕専用に

改造するための調整薬ですので……クククッ！



身体に注入された薬液の効果はすぐに現れた。

(か、身体が……熱いですっ……♡)
一秒ごとに高まっていく性感に、
解され続けた秘所は容易く絶頂へと導かれていく。

股座を覆う機械の内でわだかまる熱は、
やがて大きな波となり、
超えてはいけけないはずの一線の、
その先へと彼女を押し流していく。
(ダメッ♡ダメですッ♡ダメなのにっ♡)

そして、一際大きく腰が跳ねると同時に、
ぱっくりと広げられたティアの回から、
学ばされたばかりの言葉が紡がれた。

「おっ♡おっ♡おっ♡おまんこイクううっ♡」



「はあっ……はあっ……。わ、わたしはなんてことを……」

息も絶え絶えに、自分の口から、
絶頂と共に無意識に零れ出た言葉を反芻するティア。

それは、男の言う「隠語の刷り込み」が、
想像以上に深く、楔となって
突き刺さっていることを意味していた。

「今ので「セット……。これを一時間に一度、
とりあえずは3日……。文字通りの72時間続けます。

さて、今のアナタに耐えられますかねえ？」

「ななじゅっ……!? い、いえっ……!」

耐えますっ……! 耐えてみせますっ……!」

貴方たちの卑劣な凌辱になんて……負けませんっ!」

折れかけの心を強靱な意思で繋ぎとめ、

男を睨みつけるティア。

そんな彼女の姿を、男は不敵な笑みと共に眺めていた。

「はあ、はあ……」

「フム、どうやらアナタは我々の想定内、さらにその上を行くようだ。甘く見積もったつもりは無いんですがねえ」

ティアの洗脳、そして肉体改造が始まってから、今日で丁度一週間。

彼女の肉体は当初のそれから、大きくかけ離れたモノへと変わり果てていた。

控えめだった胸は、平均のさらに二回り以上の大きさに。引き締まっていた体型は、機械の端からはみ出るほど肉付きよく。目には見えないが、頭の中も取り返しの付かないほどの影響を受けているだろう。

しかし、そんな状況に陥ってなお、彼女の瞳からは光が失われていなかった。

「分らないですねえ。
なぜあなたはこんな肉体、そんな精神に
作り変えられてなお、気丈でいられるのですか？」

取り付けられたバイザーの下、
男の質問に対し、ティアは久々の強気な笑みを浮かべた。

「貴方達にはきっと分かりません……!!

わたしは——正義の魔法少女は……!!
待っていてくれる人たち、助けを求めている人たちが
いる限り、決して負けないんです!」

「そうですか。」

「フム。……では、あのプランでいきますか。」

「改造プラン21Cへの移行を」

男の掛け声とともに、連日と同じように、
機械群が駆動を始める。

（負けませんっ♡絶対ッ♡絶対ですッ♡
おちんぽなんてほしくくないですッ♡
おまんこしたくなんてないですッ♡
ケツマンコを穿りたくなんてありませんッ♡）

（応援してくれた男の子のショタちゃんぽを
ハメたいとかッ♡キラキラした目で見つめて
くれた女の子のロリまんこを嘗め回したい
とかっ♡ちよっと変な目で見えてきた
あの男の人のくっさい童貞ちゃんぽを
しゃぶりたいとかっ♡
ぜったいっ♡思わないですッ♡）

淫らな思考の奔流に脳を焼かれながら、
必死にその衝動に抗うティア。
そんな彼女をさらに凋落さすべく、
男は次の手を打つ。

「ひうつり!」

蕩けかけていたティア的思考を
現実に戻したのは、鋭い痛覚だった。

「わ、わたしのクリトリスに何をしたんですか!」

痛みの元、彼女の陰核に起きた異変の元凶に、
疑問を投げかけるティア。

「フ、ククッ……」

「な、なに笑ってるんですか!」

目の前の少女が、間違いなく
無意識に淫語を口に出している、
その事実を確認した男は、
満足げにほくそ笑むと、
問いに対する答えを口にする。

フ、クッ

「——すぐに、分かりますよ」

「ひんぐうううっ!?♡」

目を剥き、嬌声とも悲鳴ともつかない
声を上げるティア。

「クリっ♡クリトリスが跳ねっ♡膨らんでっ♡」
「ああああ、いいんですかあ?女の子が、
しかも正義の魔法少女ともあろうものが、
そんな声出して……ククッ!」

ククッ

ククッ

股を覆う機械の中で、ティアの
言葉通り、クリトリスが
ゆっくりと、しかし確実に
大きくなっていく。
それは怒張という域を遥かに
超え、小指、親指の大きさを
直後に上回り、そして
数分後――

「ッ!?♡♡」
身体を大きく後ろに反らし、身体を痙攣させながら、
声にならない声を上げるティア。

それと時を同じくして、
この瞬間を想定していたかのように、
股間を覆う機械の天板が外れると、
その先に満ちたピンク色の肉塊をかき分けて、
ずりゅん、と、少女の体にあってはならないはずの
剛直が、勢いよく屹立した。

「ククッ……! ハッハッハッハッ!」

その様を見た男は、天を仰ぎ高笑いを上げていた。

「こ、これ……!?まさかおちんぽ、ですか……!?」

自分の股の中心に震える、経験したことのない
感覚を伝える器官の出現に、最悪の想像を
思い描くティア。

その想像は、男の声によって現実となる。

「ククッ……その通りですよっ!
男根を少女の、しかも魔法少女の肉体に
生やすことすら、我々の技術では
容易いのですよお!」

声高らかに誇示する男を尻目に、
ティアはただひたすらに、自らの肉体に
ペニスが生えてしまったという事実を、
茫然と反芻していた。

「おちんぽ……わたしの、からだに……」



「ハァ〜〜〜………やって。

ついには男根まで
生えてしまいました。が
マジカル☆ティアさん、
いい機会ですし、もう一度問いましょう。
アナタは一体、いつまで
耐えることができますかねえ?」

あれ、わたし、何してたんでしたっけ？
昼下がりに、よく見知った近所の公園で、
唐突に意識を取り戻したティア。

（怪人の攻撃……？）

でも、何も起きてませんよね？）

辺りを歩く見渡しても、『ルードネス』の構成員は
おるか、珍しく一般の人の姿も見えない。

（……じゃあ、なんで私は魔法少女に
変身しているんでしょう？）

『戦闘態勢』を崩さないまま見下ろした
先にあるのは、『いつも通りの魔法少女衣装』。



釈然としない面持ちのまま、『変身』を解こうとするヒア。
そんな彼女の前に、ふわりと影が舞い降りる。

ティアが見上げた先に居たのは、
不敵な笑みを浮かべる、西洋風の漆黒の衣装を纏った男。

『どうも、クク……。お久しぶりです、マジカル☆ティア』

『あ、こんにちは……。えーと、あなたは……。？』

明らかに風貌が怪しい相手にも関わらず、
『戦闘態勢』は崩さないまでも、
何処か気の抜けた表情で応対するティア。

それを見た男は、口角を一層釣り上げると、
堂々と名乗りを上げた。

『クク、これは失礼いたしました。』

私、『ルードネス』の幹部級怪人、ディプラと申します』



「幹部級、怪人……!」

その言葉を聞いたティアの眉が、きりりと吊り上がる。

「なるほど……! つまり、私と決着を着けに来た、

ということですね……!」

「まあ、そんなところです。」

「ところでアナタ、

そんな状態で私と戦えるのですかあ?」

「?」

試す様に、嘲るように尋ねる怪人の言葉を、
ティアは理解できない。

『そんな状態』っていうのは、何のことでしょうか?

魔法少女衣装はいつも通り、おっぱいもおちんぼも
おまんこも、一切隠さず晒け出せてますし、

そのおっぱいだって、乳首ビンビンの

一撫で即イキ超絶感度ですし、おちんぼに至っては
過去最高に勃起した絶好調状態ですし……」

「ククク、いえ、分らないのならいいんです」

その言葉に、ティアはさらに疑問符を頭に浮かべた。



「私を惑わそうとしたってそうはいきませんッ！
イきますよッ！はああああッ！」

男の言葉を挑発と取ったのか、
ティアは怒気を含んだ声を上げながら、
『戦闘態勢』からより深く腰を落とし、
ペニスの先端を男へと向ける。

「……なにをなさっているの？」

「ふふふっ！魔法少女の基本的な戦闘態勢、
『蟹股ポージング』を知らないなんて、
幹部を名乗るのには不勉強ですねっ！」



「このポーズによって、おちんぼから出す
魔法の狙いを安定させることができるんですッ！」

——そしてこれはっ！」

ティアは一度腰を大きく浮かすと、直後——

「おちんぽ☆チャージッ！ほおおおおっ！」

間抜けの技名と共に、屹立したふたなりペニスを、勢いよく上下に振り始めるティア。その姿を見て遂に堪えきれなくなったのか、男は大声で笑い始める。

「ク——ハッハッハッハア……！」



ぷんぷん

ぷんぷん

「むっ！笑っていられるのも今の内ですよっ！」
そんな男を見て、ティアはさらに激しくペニスを振る。その姿が、更に男の嘲笑を誘うとも知らぬまま。

「ほっ♡ほっ♡ほおおっ♡

見てくださいこの先走り汁っ♡

おちんぽに魔力が満ちてきている証拠ですっ♡

ここから放たれる一撃を浴びれば、

いかに幹部と言っても一たまりもありませんよっ!」

「おおっ……。そ、それは恐ろしいッ……。クハッ」

『この状態』で警告をしたのにも拘らず、

笑いを堪えるだけで、何も行動を起こさない

ディプラに対し、ティアは一切の躊躇を捨てる。



「ッ!」

わたしはもう知りませんからねッ!

おちんぽ充填完了っ! 照準OKッ!

お望み通り、喰らって下さいッ!」

「おちんぼシュートおおッ♡んほおおおおおおおおッ♡」

盛大な技名と共に、ティアのペニスから白濁液が迸る。

放物線を描いて飛翔するそれは、一定の速度で宙を舞った直後に、びちゃびちゃと下品な音を立てて男の足元のタイルに飛び散り、不規則な模様を描いた。

そして当然、それ以上何も起きることはない。



「わたしのおちんぽシュートが効かないとは……
お、思ったよりもやりますね……♡」

正真正銘、ただの射精を終えたティアは、
だらしなく舌を突き出した表情で、男を睨みつける。
その姿を見た男は依然満面の笑みを浮かべたまま、
しかし、少し残念そうな気色を伴い、ティアへと
語りかける。

しろも…

「もう少しアナタの醜態……いえ、技を見たかった
ところですが、そろそろ目を覚ます頃合いでしょう。」

——さあ、起きてください」

「何をいつ……で……?」

男の言葉に合わせて、

虚ろだったティアの瞳に光が戻る。

「へ、あれ……?」
意識を明瞭に取り戻したティアの目に、
様々な情報が飛び込んでくる。

外、よく知る公園、改造された魔法少女衣装、
重くなった体、じくじくと疼く胸、白濁液を溢すペニス、
目の前に立つ倒すべき怪人。

——そして、その向こうに立つ群衆。

「ええ……?」
現状を満足に把握できないティアの耳に、
群衆のざわめきが次々と飛び込む。

しゅぽ..

「あれ、マジカル☆ティアじゃね?」

「最近見てないけど本物? でも、あれ……!」

「僕見ちゃった、おねえちゃんがおちんちんから、

白白おしっこおもらししてるの!」

「やっぱり、『ルードネス』に捕まって怪人にされたって

噂、本当だったんだ!」



「ち、違いますッ！わたしは——」
「その通りですッ！彼女は私達、『ルードネス』の
手に堕ちたのですっ！近日中、更に進化
いえ、退化したその姿をお見せできるでしょう！
それでは皆さま、ごきげんよう——」
「えっ！やっ！やだっ！身体が勝手に……！」

踵を返した男の後を、蟹股のまま、
ひよこひよここと追いかけるティア。
その姿を群衆は、思い思いの方法で記録し、
拡散していた。

しろうも..

（マジカル☆ティア、アナタはやはり素晴らしい。
あれだけの洗脳処置をしたのにも拘らず、
最終的に可能となったのが、短時間で解除される
認識改変と肉体操作だけとは……。）

しかし、それもあの技術さえ使えば……）

そんな男の心の内を、ティアが知るすべはなかった。

「いやはや……。先日のアナタの醜態、想像以上に拡散されてしましてねえ……。最早、アナタが『ルードネス』の怪人であることを疑う人はいないでしょう」

「う、うるさいです……。っ！わたしは魔法少女ですっ！
貴方達の仲間になんてなりません……！」

まるで犬が小便をするようなポーズで手足を拘束され、そそり立つペニスをあられもなく晒し、その上で数日前の顛末を聞かされたティアは、それでも男をキッと睨みつける。
しかしその瞳は、以前ほどの力強さを持たなかった。



「いえ、アナタはワタシ達の僕になりますよ。
あなたの意思に関係無く、ね」

その声に合わせて、無防備なティアのペニスに、
新たな機器が取り付けられる。

「ひゃうんっ!?♡な、なんですかこれ……!!」
ティアのペニスを覆うそれは、先端に半透明の
パイプが繋がっており、その逆側は、彼女の背後にある
壁に備えられたタンクに繋がっていた。

「搾精機……。文字通り、アナタのような捕虜から
精液を搾り取る際に使われる機械です」

「い、いまさらそんな拷問、わたしには――」

「ええ、今回行うのは拷問ではなく、本来の目的、
搾精です。それも、アナタの人格を宿した精液の、です」

「じん、かく……?」

人格、という文字を頭に浮かべるのに数秒を擁し、
そしてその直後、男の言葉の意味を理解して
顔を蒼白に染めるティア。

「そ、そんなことできる訳が
「できるのですよ。我々の技術を以てすれば。
先にアナタに注入したナノマシン――
あれがアナタの、マジカル☆ティアの人格を
電気信号として吸収し、その後精液として排出されます」

「後に残るのは、人格を失った肉体と、
人格を持った白濁液、という訳です。」

さて、アナタのペニスも準備万端の
ようですし、さっそく始めましょうか」

「やだ、おねがいします、まって」

「ではさようなら、マジカル☆ティア」

ティアの嘆願も空しく、男の手が、スイッチに触れる。



「んほおおおおおっ!?♡」
搾精機の駆動と同時に、
ティアのペニスから白濁液が迸る。
かつて経験した射精の感覚とはまた異なった
喪失感に、男の言葉が嘘でないことを確信させる。

「とめないとおっ♡とめないとお♡」
目を剥きながら身体を振るティア。
しかし、手足を完全に拘束されている現状、
ペニスを僅かに揺らすだけに留まり、
射精を促すことはあっても、
状況を脱する一助になることはなかった。



「排出率95%……そろそろ仕上げとしますか……」

「おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

猿のような嬌声を上げながら、精液を撒き散らすティア。その姿に、もはやかつての魔法少女としての清廉さは一切感じられなかった。

彼女の姿を満足げに一瞥した男は、その耳元で、ゆっくりと、囁き始める。

「さて……今のアナタは何ですか？」

「おっ♡ていっ、ていあっ♡まほーしょーじょのっ♡」

「おっと……この段階でも自我を保つとは……しかし、不正解。いまのアナタはザーメン。このままペニスから排出されるだけの存在。でもいいでしょう？ 最上の快楽が味わえるのだから」

「うんっ♡きもちいいのすきっ♡だからていあはざーめん♡おちんぽからでてっ♡いっばいきもちよくなるっ♡」

「いい子です。——では、イキなさい」

「うんっ♡イクッ♡イクううううううううううっ♡」

その嬌声を最後に、部屋の中はしんと静まり返った。

ホドドッ

ビビビッ

びるるるる

「……………」
「ふふ、あの高潔な魔法少女も、
こうなってしまうえば可愛いものですね」
目を見開いたまま、死んだ様に微動だにしないティア。
その瞳から、一筋の涙が、力なく零れ落ちていく。

そんな彼女の姿を前に、男は、新しい玩具を手に入れた
子供のような笑みを浮かべ、
次いで部下たちに指示を下した。

「肉体、人格、共に予定通りの処理に入れ。」

——さあ、骨の髄まで穢してあげますよ。

『マジカル☆ティアという存在をね』



薄暗い闇の中、蛍光色の液体で満ちたカプセルの内側で、かつて魔法少女だった存在がゆらゆらと揺蕩う。その傍らの機器から、無機質な機械音声が、まるで死刑宣告の如く、無慈悲に流れ続ける。

『戦闘員化シークエンス開始』

『筋肉量減少』

『脂肪量増加』

『性感度増強』

『味蕾改造』

戦闘員化プログラム
肉体改造：完了
基礎人格排泄：完了
理想人格インストール：準備中

インストールを開始しますか？

Y/N

「首尾はどうですか？」

ティアを貶めた張本人、ディプラは、カプセルを眺めながら、傍らに立つ研究員の男に問いかける。

「はい、肉体の改造はほぼ100%完了しました。」

指示通り、スペックとしては下級戦闘員のものですが

「よろしい。では」

「はい、残すは精神面、人格のインストールのみですが……」

こちらも指示通り、仮想人格01でよろしいですか？」

「ええ、宜しく願います」

戦闘員化プログラム
肉体改造：完了
基礎人格排他：完了
仮想人格インストール：準備中
インストールを開始しますか？

Y/N

」

「あ・ああ・あ」

仮想人格01、インストールを開始します」

無機質な声が、今度は機械からではなく、ティアの喉元から漏れ出る。

「性格、インストール完了」

「必要語彙、インストール完了」

「基本戦闘技能、インストール完了」

「性的技能、インストール完了」

「組織への忠誠心、インストール完了」

闘員化プログラム
身体改造：完了
基礎人格排泄：完了
仮想人格インストール：動作中
仮想人格インストール中.....

50%

「仮想人格01、インストール完了しました。
続けて、戦闘員用ボディースーツを展開します。」

その声に合わせて、ティアの喉元を包む首輪から、
どろりとした鈍色の液体が溢れ出すと、彼女の体を覆っていく。
「そのボディースーツは、着用したままでも老廃物、体液の排出が可能で、
衛生状態もある程度の水準を維持してくれる優れモノです」

「とはいえ、そんな機能が付いているということとは、

すなわち、装着者の常時着用を想定しているということでもあり、
事実、一度展開したそれは、肌と分子レベルで融合し

二度と脱げないのですが……。おっと、貴女は既に先ほどのインストールで
『知って』いましたね……。クククッ!」

嘲笑う男の前で、取り返しをつかない侵食が、ティアの肉体を蝕んでいく。

プログラム
インストール完了
戦闘員用ボディースーツ
強制着用開始

「ボディースーツ定着完了。」

全戦闘員化行程完了。

固体名『マジカル☆ティア』を、『戦闘員272号』に改定。
待機状態に移行します。」

ティア——戦闘員272号はそう呟くと、

カプセルの中に浮かんだまま動きを止める。

その言葉を聞いたディプラは、にいと口角を釣り上げると、
彼女に向け語りかける。

戦闘員化ブロック
固体改造：完了
基礎人格排泄：完了
理想人格インストール：完了
ボディースーツ定着：完了



「さて、戦闘員272号、

早速ですが、自己紹介をお願いします。」

「はい、ディプラ様。」

わたしは固体名『マジカル☆ティア』を素体として作られた、
ディプラ様直属の下級戦闘員、272号です」

「主な職務は一般市民に対する強襲、

及び上級職員様への性奉仕となります」

「クククッ……、ハァ——ッハッハッハッ！」

その通り、その通りですッ！アナタの初任務は追って伝えるので、
楽しみに待っているのですよおっ！」

「はい。」
「『ルードネス』に永遠の忠誠を」

高笑いするディプラの前で、ティアだったモノは唯々無表情に、
光の喪われた目で虚空を見つめながら、佇んでいた。

戦闘員化プログラム：完了
身体改造：完了
基礎人格排除：完了
理想人格インストール：完了
ディスーツ装着：完了

本名『ティア』の
戦闘員272番への改造が完了しました

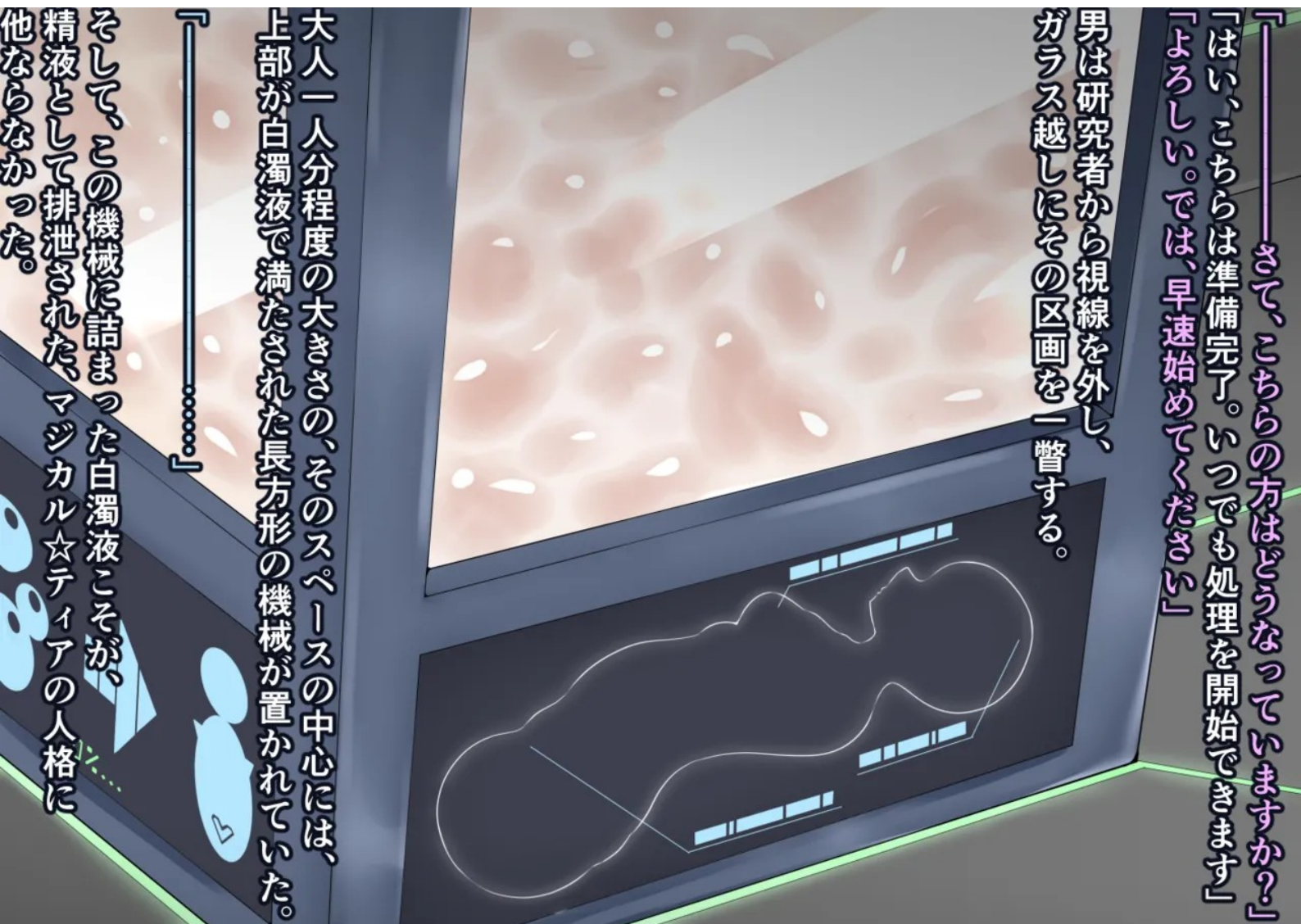


「さて、こちらの方はどうなっていますか？」
「はい、こちらは準備完了。いつでも処理を開始できます」
「よろしい。では、早速始めてください」

男は研究者から視線を外し、
ガラス越しにその区画を一瞥する。

大人一人分程度の大きさの、そのスペースの中心には、
上部が白濁液で満たされた長方形の機械が置かれていた。

そして、この機械に詰まった白濁液こそが、
精液として排泄された、マジカル☆ティアの人格に
他ならなかった。

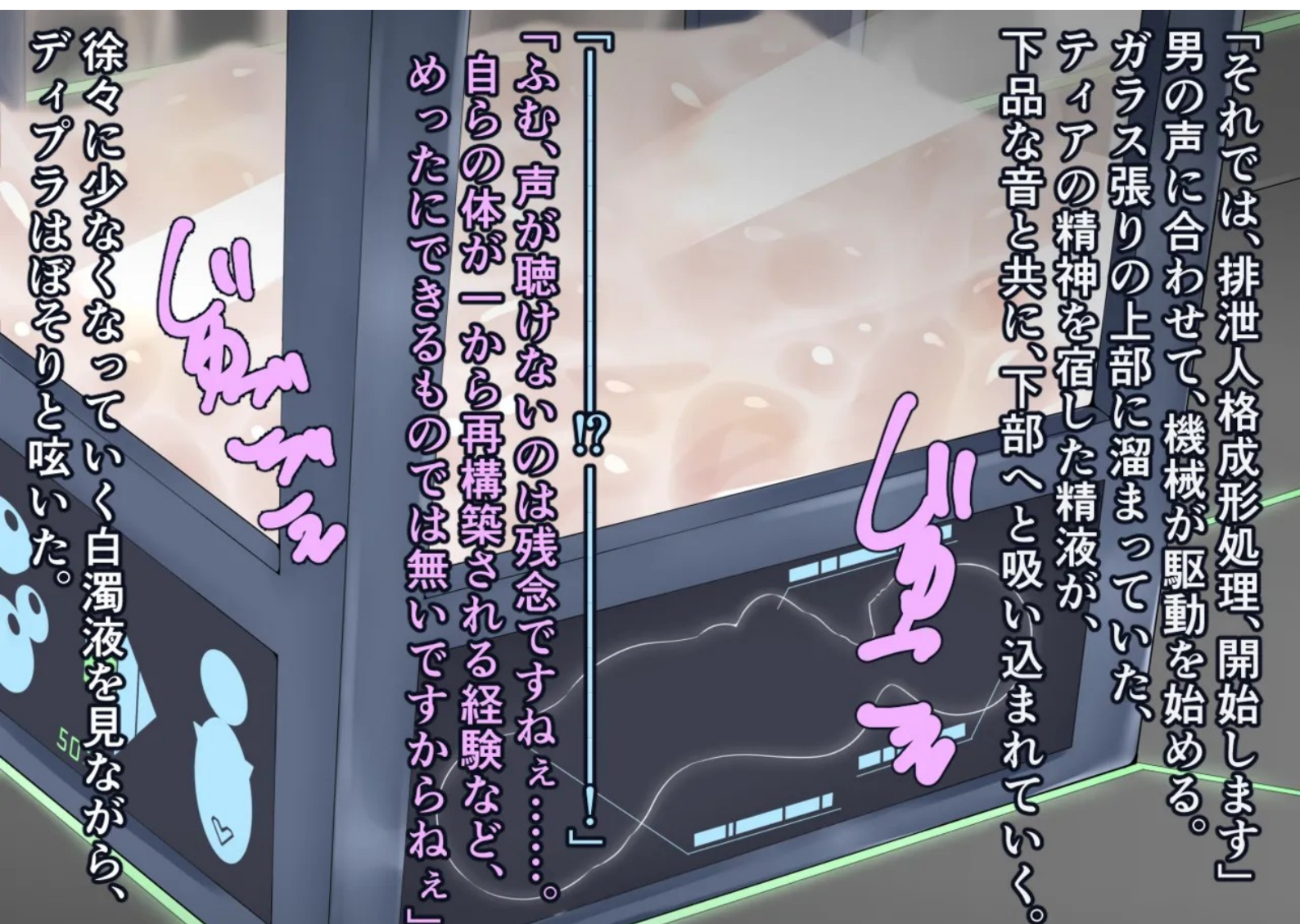


「それでは、排泄人格成形処理、開始します」
男の声に合わせて、機械が駆動を始める。
ガラス張りの上部に溜まっていた、
ティアの精神を宿した精液が、
下品な音と共に、下部へと吸い込まれていく。

「ふむ、声が聴けないのは残念ですねえ……。
自らの体が「から再構築される経験など、
めったにできるものではないですからねえ」

いふふふ

徐々に少なくなっていく白濁液を見ながら、
ディプラはぼそりと呟いた。



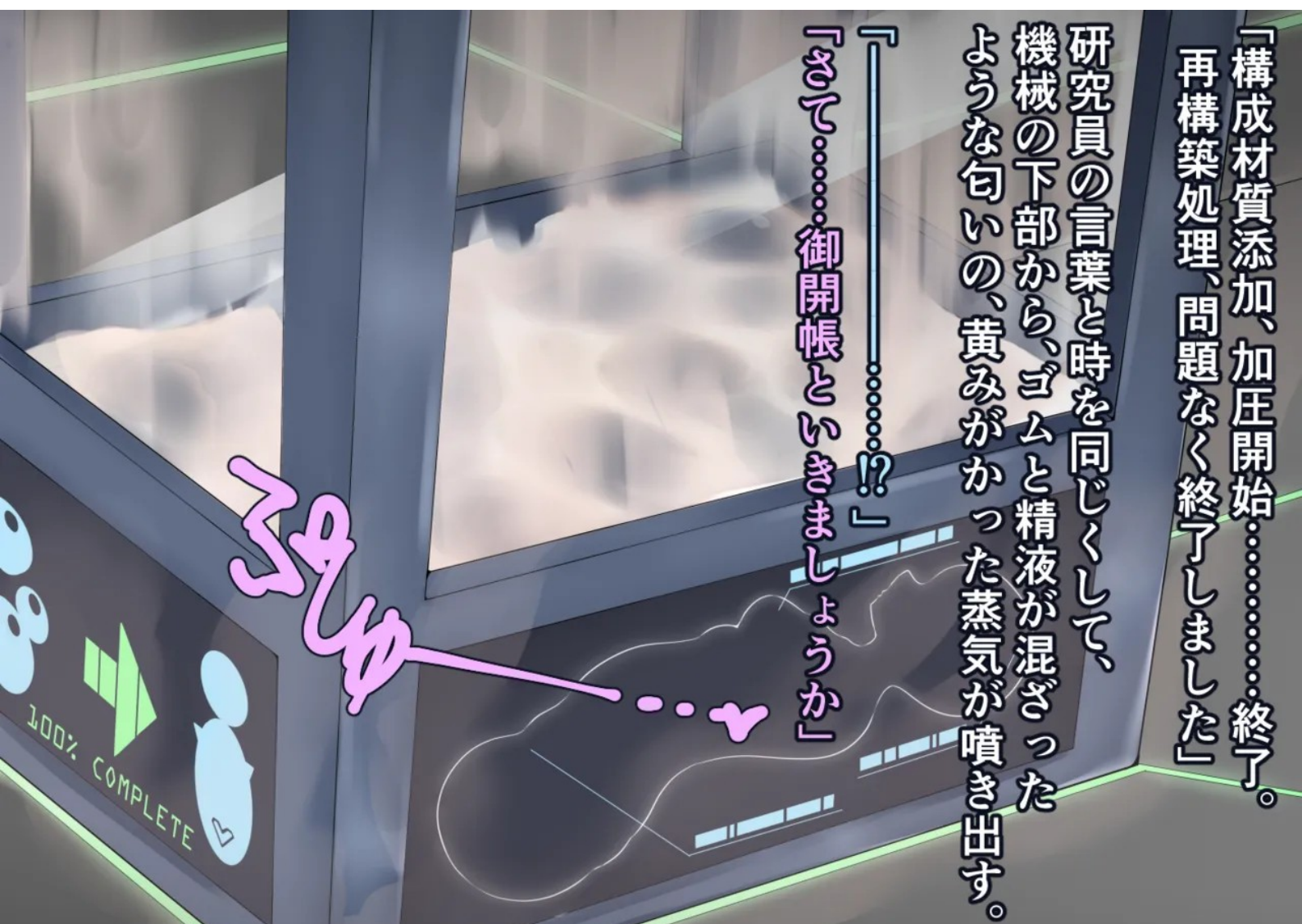
「構成材質添加、加圧開始………終了。
再構築処理、問題なく終了しました」

研究員の言葉と時を同じくして、
機械の下部から、ゴムと精液が混ざった
ような匂いの、黄みがかった蒸気が噴き出す。

「………!!」

「さて………御開帳といきましようか」

ふやふや



機械がゆっくりと持ち上がり、直前に生み出したものを外界へと曝け出す。舞い上がる蒸気の内から現れたそれは、ティアを模した黄色のゴム塊——オナホールだった。

「ディプラ様。ゴランの通り、オナホール化処理、問題なく終了しました」
「ククク……素晴らしい！良い働きですよお！」

もわん

粘液に塗れたオナホール——ティアの人格は、四肢を喪った姿で、茫然とした表情を浮かべていた。

「ククク」
「ウツ！」

性的玩具と成り果てた筈のそれが浮かべる無垢な表情は、ディプラの嗜虐心をより一層高め、ぶるりと身を震わせる。

（あ、あれ……!! 身体感覚が戻って、ます……!!
で、でも、動けませんし、声も出せません……。
それに、ここはどこなんですか……!!）

突然戻った五感に、困惑を隠せないティア。
そんな彼女を、ディプラが頭上から覗き込む。

（あ、あなたは幹部の——

って、ど、どうしてそんなに大きくなってるんですか……!!
一体わたしに何をしたんですか……!!）

「喋ることのできない今のアナタが、
何を考えているかは分かりませんが、
大方自分の身に何が起きたのか、と
お考えでしょう。」

クク——、そこで親切な私が、
今のアナタがどうなっているのか、
教えて差し上げましょう——」

男の声に合わせて、ティアの頭上に、
彼女の姿が大写しとなる。

——オナホールと成り果てた、
今の姿が。

え?）

「クク……初心なアナタはご存じないかもしれませんが、
その姿はオナホール……男性が自慰に用いるグッズです」

——うそ、ですよ? こんな、嘘に決まって……」

「信じられないでしょうが、しかしアナタの現状——

意識も五感もあり、しかし体は動かせない……。

今視えている姿、そのままなのはあ? クククッ……!」

（……いや。いやです、こんなの……! いやあああッ……!）

ティアが発したその悲鳴は、誰の耳にも届くことは無かった。



マジカル☆ティアが姿を消してから二週間。
様々な噂がまことしやかに囁かれる中で、
一本の動画が、ある動画サイトに投稿された。
そこに映っていたのは、体型を大きく変え、
戦闘員のような装いを身に纏うマジカル☆ティア。

そして、変わり果てたその外見と同様に目を惹いたのは、
彼女がその男根を挿入する、同じくティアを模したオナホールだった。

「……仮想人格『完全洗脳ティア』、ロード完了。

予定された台本に従い、行動を実行します」

（や、やだっ………！ 抜いてッ………くださいっ………！）



「画面の向こうの皆さん、お久しぶりですっ♡
元マジカル☆ティアの、戦闘員272号です♡
見えますか？♡このおっぱい、このお尻、このおちんぽ♡
偉大なる『ルードネス』に改造していただき、
このような素晴らしい姿になることができましたあ♡」

「更には頭の中まで弄って頂き、もうエッチな事しか
考えられなくなっちゃいました♡

もし街で会ったら男女問わずチ犯しますので、ご注意くださいね♡」
（ち、ちがいます……！ こんなこと、わたし言いません……！）



「さて、今回は皆さんへの決別の機会として、
このような場をご主人様に用意して頂きました♡
見えますか？このオナホ♡
これ、魔法少女だった時のわたしを模してるんです♡」

「今回はこのオナホを皆さんの前でブチ犯すことで、
わたしがどうしようもなく変わっちゃったってことを
ご理解いただければと思います♡
それではいきますよお♡」

（ま、待っててください！）

戦闘員は、にこりと柔らかな笑みを浮かべ、そして――



「おっ♡おほっ♡すげっ♡これがおまんこの感触っ♡
たまんねえですっ♡皆さんっ♡

実はわたし、おちんぽをおまんこに挿入れるの初めてなんですよお♡」
(ひぐうつ♡やめっ♡ひゃあんっ♡
からだのなかつ♡ぐちゃぐちゃになってっ♡
なのになんでこんなにもいいんですかあっ♡)

ぱちゅん

ぐちゃん

一心不乱に抽挿を続けるティアの姿に

以前の面影が皆無であることは、もはや誰の目から見ても明らかだった。
しかしなお、戦闘員と化した彼女は、

以前の自分を人々の中から消し去るべく、自らを犯し続ける。

「おほっ♡ねえ皆さんっ♡わたしのおまんこ、すっげえ気持ちいいですッ♡このオナホまんこ、改造前のわたしのそれそのままの形らしいんですっ♡なのにこの名器って♡わたしのおまんこの才能凄すぎですよおっ♡」



ぱちゅん

ぐちゅん

「まあ、以前の私はセックスなんてしたこと無かったんですけどねっ♡まったく♡宝の持ち腐れでしたよお♡あ♡皆さんのおちんぽは、更に気持ちよくなった改造おまんこで搾り取って差し上げるので、楽しみにしててくださいねえ♡」

「あっ♡そろそろイきそうです♡皆さんっ、見ていてくださいね♡
わたしの膣内に、くっさいおちんぽみるくをいっぱい射精すところお♡」

（待っ♡やめ♡）

「イクっ♡イクっ♡イクっ♡いますううううううッ♡」

~~~~~ッ♡♡♡♡♡

目を剥き、嬌声を上げながら、自らの内に精を吐き出す272号。  
勢いよくオナホの口部分から飛び出した白い奔流は、  
画面の外側へと放物線を描いて飛び、  
マイクからやや離れた場所に汚らしい音を響かせた。

びゅん

びゅん



「あ~~~~~………♡ 気持ち良かった♡

さて皆さん、わたし、マジカル☆ティア

『元』マジカルティアの醜態、じっくりご覧頂けましたでしょうか♡  
『こんな風』になりたくなかったら、くれぐれもわたしにはご注意を♡」

「逆に、わたしを犯したい、犯されたいっていう人は、  
ぜひ見かけた際にお声掛けを♡

ぐちゃぐちゃになるまで凌辱した後に、わたしみたいな

戦闘員にして差し上げますから♡

それでは皆さん、ごきげんよう♡」

再びにこりと微笑んだ彼女の姿を最後に、投稿された動画は終了した。

じろろ…



「仮想人格、再生停止。基本状態に移行します」

「クク……素晴らしい。名演でしたよ、272号」

「ありがとうございます、ディープラ様」

カメラが止まると同時に、憑き物が落ちたかのように、すん、と無表情を浮かべる272号。

「ククク、『人格を別物に挿げ替えられた』か、『洗脳され変態になった』かなど、見ただけでは分かりませんからねえ……。洗脳に耐えきったアナタには悪いですが、世間の印象は、『快楽に屈した裏切者』です。くやしいですかあ？と、もう喋れないんでしたね、クハハハッ！』

ディープラの声に顔色一つ変えず——変えることも出来ず、p菜穂となったティアは、口の端から精液を垂らし続けていた。





「さあ、起きてください」  
「ん、え……？」

初めての性交——しかも、オナホとしての——の  
ショックに意識を失っていたティアは、  
男の声に気付き、ゆっくりと目を開く。

そして、「目を開く」事ができたことに気付き、驚きの声を上げた。

「か、身体が……動きます……！」

慌てて自分の身体を見下ろすが、辺りは暗く、ほとんど見えない。  
目を細めて僅かに見えるのは、自分の意思通りに動く手、  
そして足のシルエット。

多少の違和感こそあれど、間違いなく生身の身体だった。

「起きましたか」  
「……！」

再び聞こえた声に顔を上げるティア。  
目の前にはピンク色を帯びた半透明のガラス。  
そして、その向こうに立つのは、忘れがたい、  
自分を幾度も苦しめた男の影。

「ディプラ……!!」  
「おっと、覚えて頂けて何よりです」

神経を逆なでする男の声に、思わず眉をひそめるティア。





「……何のつもりですか？わたしの身体を動かせるようにして……。まさか、わたしが自分から貴方達に従うとでも思ってるんですか？」  
「ええまあ、いずれはそうして頂く予定ですが……」  
「だとしたら、時期を誤りましたねっ！」

ティアは狭いスペースの中、精一杯身を引き、男へと照準を定める。

（大丈夫です……！この前みたいに頭はぼんやりとしてない……。洗脳は解けてますっ！）

「マジカル☆シュートっ!!」

声を振り絞り、いつも通り、魔法を放とうとするティア。  
しかし――

「な、なんでですかっ!?魔法が使えません……!?」

「クッ……!クククッ……!クハハハハハ――ッ!」

堪えきれないといった様子で、盛大な笑い声を上げる男。

「魔法が使えないのは当然ですよおっ!  
なぜなら、今のアナタは魔法少女ではなく――」

男がパチンと指を鳴らすと、辺りの照明が一斉に点灯する。  
「うっ……?」

一瞬白く染まる視界。そして、目が慣れた彼女の視界に、  
自身の肉体が映った。





「なぜなら、今のアナタは魔法少女ではなく、怪人なのですから！  
ハァ——ハッハッハッハッ!!」

彼女の目に映った自分の肉体は、以前のそれとは全く異なっていた。  
肌は妖艶な光沢を放つ褐色に。  
顔に掛かる髪からは色素が抜け、まるで精液のような、  
黄みがかった白色に。  
臀部からは尻尾が生え、足に纏わりつくようにゆらゆらと揺れる。

そして何より、その身体を中心。  
そこには、依然に改造された際に付けられたそれと比べると  
遥かに小さい、いわゆる短小包茎と呼ばれる形のペニスが、  
あるうことか、自身を象ったオナホールに  
挿入された状態で鎮座していた。

「は？え、え？なんですか、これ？」

想像を遥かに超えた現状に、思考が停止するティア。

戸惑う彼女の姿をガラスの外側から眺めながら、  
クッククック、と笑い続けるディブラ。

【レティナ】  
オナホール化処理を  
ディカル・ティアの人格を、  
処理を行った同人の肉體とし  
て、精液を素材として、  
オナホールにリンクさせ



「説明して差し上げましょう。」

アナタの今の身体は、元々のアナタ、そして猫のDNAから作成した怪人のものです。

そしてその身体と、オナホールとなったアナタの人格をナノマシンを通じてリンクさせてあります。

ですので、もしオナホールからペニスを抜いたりすると、オナホールの身体に逆戻りですのでご注意を、クククッ！」

「な、なんですかそれ……！」

「ちなみに、怪人としての能力は特にありません。

戦闘能力も皆無、下級戦闘員になった元の身体にも100%負ける程度には弱いので、

気を付けてくださいねェ！」

「そ、そんなっ……!?」



「それよりも、あまり機微に動かない方がいいですよお？  
その身体は特に性感帯が強化されていますからねえ。  
あまり無駄に動くと――」

「へ――？」

【レティナ】  
オナホール化処理  
シカル・ティアの人格を  
処理を行った同僚の  
れた精液を素直に  
ホディにリロードさせ



「おほおおおんっ!!♡」

「そんな風に早漏雑魚ペニスが感じて、直ぐ射精しちゃいますからねえ、クククッ!」

突然身体を貫いた快感に、情けない声を上げるティア。

(にや、にやんでっ♡ ちょっと身体を動かしたただけなのにっ♡)

身体が揺れ、それに合わせて動いたオナホールに、僅かに擦られた——そんな些細な快感によって、彼女が得たペニスは、容易く射精に導かれた。

それほどまでに、絶望的なほどに、彼女の今の身体は、性に特化した構造となっていた。否、そのように造られた、といった方が正しい。

(たえなきやつ♡ 慣れなきやつ♡ 堪えなきやつ♡ 大丈夫っ♡ わたしならッ♡ マジカル☆ティアならできますっ♡)

ひゅん

快楽に押し流されそうになれながら、持ち前の強靭な意志で、何とか射精を堪えようとするティア。

しかし——

【レティナ】  
オナホール体には、人格を、  
マジカル・ティアの一人の身体  
処理を行って、人々の素性を  
れた精液と素材とし、リンクさせ  
ホティアにリンクさせ





10

1

1

A stylized purple logo featuring the letters 'ZP' in a bubbly, rounded font. A small, simple figure of a person is integrated into the letter 'P'. The logo is set against a light brown background.



誘う。



「だめえっ♡しゅごいのがっ♡くりゅっ♡」  
「いいんですよ？本能に、衝動に任せて。」

それが、いまのアナタに相応しいあり方なのですから！」

かつてない快楽の波が押し寄せていることを、  
直感で悟るティア。

押し流されまいと必死に堪える彼女を、  
ディプラの甘言が誘惑する。

「だめっ♡だめっ♡だめですっ♡  
次に射精したらっ♡もう戻れなくなるようなっ♡  
そんな気がっ♡」

「アナタはもう戻れませんよお……？  
自覚しなさい、アナタの、今の姿をお！」

ひびくるん

ディプラの姿に、ほぼ無意識に自分の姿を——  
自分の形をしたオナホを犯し、犯されながら、  
絶頂を続ける猫怪人の姿を想像するティア。

（あ♡）  
それが最後の引き金となり、彼女の意識は、  
真白に塗り潰されていく。

「イ——クううううううっ♡♡♡」

【ティナ】  
メナホール化処理を、  
デジタル・ティアの人格を、  
処理を行った同人の肉體とし、  
れた精液を素材として、  
ホディにリンクさせ







「……本当に、約束は守るんですよね？」

「ええ、もちろんです。」

『今のアナタが、前のアナタの身体を、自身より早く絶頂に導く』、  
これが成された暁には、アナタを元の状態に戻し、解放しましょう」

妖艶な雰囲気の中、キングサイズのベットのうえで、

ティアは、戦闘員となってしまうた自身の身体の上に跨っていた。

長い長い射精を終えたの直後、男から持ちかけられた取引。

ティアにとっては圧倒的不利な内容であることは

疑いようもなかったが、しかし男の言う通り、

明確なチャンスであることも、間違いない事実だった。

「しかし、アナタの方こそ理解していますか？」

絶頂に導くのは、『セックスによってのみ』です。

アナタはそのペニスを、自らの膣に挿入しなければなりません  
今のアナタに耐えられますかねえ？」

「た、耐えて見せます！ 絶対！」

ティアは男を睨むと、改めて自身の以前の肉体に向き直る。





(こ、これがわたしのおちゃんぽ……!!  
こ、こんなに大きかったでしたっけ……♡)

一目視界にいれた瞬間から、ティアはそそり立つ男根から、目を離せなくなっていた。  
無意識の内に胸は高鳴り、小さなペニスが少しだけ膨らみ、そして、御馳走を前にした犬のように、僅かに舌を出し涎を垂らすティア。

(ククク……。意識して抑えようとしても無駄……。それがその肉体に刻み込まれた本能です)

(そもそもその身体は、ペニスに負けるよう造られている。この勝負は始めから、アナタの必敗だったのですよお! ククククッ……!)

ペニスを見つめたまま動きを止めるティアを眺めながら、ディプラは心の内で勝鬨を上げた。





「おやあ？ 如何なさいましたあ？ 随分慎重なご様子ですが……。アナタとしましても早く勝負を付けなければ、先のように急に射精してしまう恐れがあるのではあ？」  
「わ、分かってますっ！」

口ではそういうティアだったが、身体の動きは鈍い。



ティアは直感で理解していた。  
もしこのペニスが挿入されてしまえば、  
その瞬間にでも自分は負けてしまうだろう、と

（大丈夫、大丈夫、大丈夫ですっ！）

わたしは魔法少女、こんな辱めになんか負けません

そんな考えを覆い隠そうと、ティアは必死に  
心の中で、大丈夫、と反芻を続ける。

しかし――



「ああ、そうでしたっ！  
初心なアナタだ、勝手が分からないのも当然でしたね。  
どれ、一つ手伝って差し上げましょう」

そんな少女の覚悟を、ディプラは容易く踏みにじる。



「へー？」

微動だにしていなかった『元』ティアの身体が、  
男の声に合わせて動き、力強く勃起するそれを、  
ずぷり、とティアの膣内に挿入した。

その事実をティアが認識したのは、送れて数秒後だった。



「え、あ——？」

挿入れられた  
その事実を認識した瞬間、彼女の肉体の本能が、  
ある結論を導き出す。

（あ、終わった♡）

それに次いで、認識を拒否していた感覚、  
絶望的なまでの快樂の奔流が、  
堰を切ったかのように押し寄せる。

それに追い打ちをかけるように  
『元』ティアが再度腰を突き上げた瞬間、  
彼女の脳を、溜めに溜まった快感が焼き焦がした。









(だめっ♡だめですっ♡まけませんッ♡  
わたしはっ♡せーぎのっ♡まほうしょうじょなんですっ♡)

徐々に早くなるピストンを受けながら、  
必死に歯を食いしばって耐えるティア。

速くなる鼓動、きゅう、と締まる膣、オナホの中で震えるペニス、  
そのどれもが、彼女に早く射精せと急かす。



(まけませんっ♡まけませんっ♡まけませんっ♡  
まってくれているみんなのためにっ♡  
まほうしょうじょにもどるためにっ♡  
わるいひとたちをたおすためにっ♡)

わたしはっ♡まけませんっ♡まけませんっ♡  
まけっ♡まけっ♡まけっ♡——♡)



「んおおおおおおおおおっ♡♡♡」

しかし、彼女の心を裏切り、肉体が先に限界を迎えた。

彼女の意思を無視して、勝手に噴き出す白濁液。

射精と同時に溜めに溜まった快樂が一息に押し寄せ、折れかけだった彼女の心に、致命的な一撃を与えた。

(まけ、ちゃいましたあああああ……♡)

甘美な余韻の中で、彼女の魂に、敗北の悦びが、快樂に溺れる幸福が刻み込まれていく。

この瞬間に、『正義の魔法少女・マジカル☆ティア』は、世界から完全に消失した。



放物線を描いて飛ぶ精液が、『元』ティアの身体に降り注ぐと同時に、彼女の膣内にも、『元』ティアの精液が注ぎ込まれる。

「おっ♡おっ♡おっ♡」  
（キタっ♡中出しキタ、にやああっ♡  
あったかいっ♡きもちいい♡うれしいにやあっ♡）

「おっ♡おっ♡おっ♡」  
（あっ♡すごいです、にやあっ♡  
がまんしてたときより、ずっとずっときもちいいっ♡）

彼女の崩れ落ちた心は、直前まで拒否していた快感を、全力で享受する。

そんな、完全に堕ちた少女の顔を、ディープラは満足げに眺めていた。





「はあ——♡ はあ——♡」  
「……さて、勝負はワタシの勝ちのようですね？」

息も絶え絶えに身体を揺らす少女を前に、  
ディプラは醜悪な笑みを浮かべながら、  
初めから勝敗の決まっていた勝負の結果を口にする。

「約束通り、アナタは今後、決してかつての姿に  
戻ることなく、我々の下に従属して頂きます。  
よろしいですね？ マジカル☆ティア——」

—— いえ、愛猫怪人フォルティナ」

男のその言葉、認めてしまえばもう後戻りはできない、  
その致命的な質問に対し、

「はい、ですにゃあ♡ディプラ様あ♡」

—— 堕ちた少女は、満面の笑みで答えた。



とある豪華な、しかし薄暗いパーティー会場の壇上に、その二人の少女は立っていた。

彼女たちはそれぞれ、異なるベクトルで卑猥と呼べる姿をしていたが、本人たちはそれを気にする様子もなく、ただただ虚ろな表情を浮かべたまま佇んでいた。

ここは、『ルードネス』と裏で繋がりを持つ権力者たちの集い。彼らは、かの有名な『マジカル☆ティア』が『ルードネス』の手に墜ちたと聞き、この場に集まっていた。



「ほう、あれが……………」

「話には聞いていましたが、良い仕事をしますなあ」

「つくづく、この集いに参加して良かったと思いますわ」

参加者が口々に完走を述べる中、彼女を落とした張本人、ディプラが壇上に歩み寄る。

「フフ、皆様様方、お集まりいただきありがとうございます」



「さて、それでは早速ではありますが、  
今回の経緯を……折角です。彼女本人の口から説明して頂きましょう  
272号」

「はい、ディプラ様」

男の声に合わせて、戦闘員と成り果てたティアの肉体——  
272号が、傍らに立つ少女、マジカル☆ティアの人格の末路である  
愛猫怪人フォルティナの、股間に突き立つオナホールに手を添えると、  
勢いよく上下に擦り始める。



「ひゃううんっ!?!」  
その刺激に、虚ろだった目を剥き、嬌声を上げるフォルティナ。

「フォルティナ、皆様にご説明を」  
「は、はいです、にゃあっ♡」

しかし直後、272号の発した声を聞き、  
見た目の上ではしっかりとした面持ちで、観客の方を向き直る。

「皆様、はじめましてですにやあっ♥  
272号様にシコシコして頂きながらで失礼しますにやあ♥」

あられもない言葉を、大真面目な表情で口にするフォルティナ。  
その姿が観客の失笑を買うが、彼女は気にする様子もなく続ける。

「ご紹介にもあった通り、わたしは元マジカル☆ティアの  
愛猫怪人フォルティナですにやあっ♥」



「一か月ほど前に偉大なる『ルードネス』に敗れた後、  
肉体から人格を抽出して頂き、現在のこの身体になりましたにやあ♥  
当初は人格の本体は、この短小包茎ザコちゃんぽが刺さった  
ティアオナホでしたが、完全に人格の転送が終わった今では、  
ただの飾り、わたしのおちゃんぽケースですにやあ♥  
いまは偉大なる『ルードネス』の最下級怪人として、  
えっちなご奉仕をさせていただいてますにやあ♥」



「つ、続いてっ♡ 272号様の  
ご紹介をさせて頂きますにやあっ♡  
272号様は、人格が排泄される以前の私の肉体を、  
ディプラ様が手ずから改造なされた下級戦闘員であり、  
いまのわたしの飼い主ですにやあ♡  
以前にはその立派なおちんぽで、  
偉大なる『ルードネス』への忠誠を拒んでいたわたしを  
説得していただきましたにやあ♡」



「げ、現在では、わたしと272号様、ともにディプラ様の  
御傍付きとして奉仕させて頂いていますにやあ♡  
最下級怪人の身で幹部様のお傍に居られるなんて、  
光栄なことですよにやあ♡」  
「はい。ディプラ様には、永久の感謝と忠誠を」

「そっ♥それでは最後に♥  
改めて皆様の前で、偉大なる『ルードネス』への忠誠を  
宣誓させていただきますっ♥にゃあっ♥」

速くなる272号のオナホコキに、言葉が途切れ始めるフォルティナ。  
しかしそれでも彼女は、主人であるディプラの指示に従い、  
射精を必死に我慢する。

「わたし、フォルティナは」  
「わたし、戦闘員272号は」



「偉大なる『ルードネス』に逆らったことを未来永劫悔い改めっ♥」  
「その代償として、身も心も偉大なる『ルードネス』に捧げ」  
「かつて倒そうとした方々に、この身を尽くしてご奉仕しっ♥」  
「かつて助けた者達の、穴という穴を犯しつくし」  
「そしてっ♥決して自分が『マジカル☆ティア』という  
存在であったことを忘れずっ♥」  
「人々を失望させる、醜態を晒し続ける  
存在であり続けることを」



『誓わせてっ♥頂きますにやああああああ♥♥』  
その声と共に、フォルティナのペニスから、精液が噴き出す。

オナホの口から吐き出され、宙を舞う白い奔流。  
それが地面に落ちると同時に、会場から拍手が巻き起こった。

彼女らが見せた醜態に――

『ルードネス』の持つ技術に――  
ディプラの行った調教の趣向に――



向かう先は違えど、会場に集う参加者が送るのは、  
嘘偽りのない称賛だった。

その様に満足したのか、ディプラは口角を釣り上げながら、  
再び壇上へと立つ。

『さて。本日のショー、お楽しみ頂けましたでしょうか？  
しかしまあ当然、これで終わりではありませんっ！』

その言葉を聞き、会場から歓声が湧きあがる。

「元マジカル☆ティアの肉体と、それを基にした性特化の怪人の肉体——  
どちらでも好きな方を、好きなだけお使いくださいっ！」



「デカチチ、おまんこ、ケツまんこ、おちんぼ  
お望みのまま、どうぞ心ゆくまで犯し尽くして頂ければ」  
「精一杯ご奉仕させて頂きますにゃあ♥」

二人の声に惹かれるようにして、男たちが一斉に群がり、  
一瞬で二人の姿は見えなくなる。

それを一瞥したディプラは、満足したような顔で、  
会場から姿を消した。



マジカル☆ティアが姿を決して数か月。  
動画サイトに投稿された動画の存在に加え、  
各地で彼女によく似た戦闘員が目撃されたことから、  
彼女が『ルードネス』の手に落ちたという予感、  
人々の中で確信に変わっていた。

しかし、戦闘員となった彼女と共に人々を犯す、  
猫を模した姿の怪人の正体を知るものは少ない。



今日も彼女たちは何処かで、  
守りたかったものを、その手で穢し続ける。  
侮蔑の視線、失望の声、  
それらを一身に受けながら――